

母の 645 ひろば

doshinsha / haha no hiroba

『神隠しの教室』（山本悦子作）、野間児童文芸賞を受賞しました！ 2
わたしが読んだ童心社の本①／宮川健郎 3
図書館・書店の本棚に「読める・読みやすい」本を！／成松一郎 4
紙芝居作品をみる会レポート「紙芝居とは舞台プロデュース」／加藤純子 6
新刊紹介／立石展大 7
受賞のお知らせ 7

イラスト／津田櫓冬



おぼえて語る

松岡享子

お話を語る——それは子どもたちに「文学の水門を開いてやること」。そう信じて50年以上語りつづけているうちに、全国にずいぶん仲間が増えた。うれしいことである。

語り手と聞き手が時間と空間を共有して物語をたのしむという点では、わたしたちのお話も、じいちゃん、ばあちゃんが炉端で語っていた「昔っこ」と少しも変わらない。唯一違うのは、口頭伝承から切り離されてしまった現代の語り手たちは、本を頼りに、文字からお話をおぼえて語らなければならないということだ。

おぼえる……というのは、決して暗記のような味気ない作業ではないが、さりとてらくにできることでもない。ひとつの物語を自分のものにして、自由に語れるようになるために、語り手たちは、それぞれ自分なりのやり方でお話と格闘している。テキストを何度も紙に書いておぼえる。書いた紙を家のあちこち——流しの上が多いようだが——に張り付けて、家事をしながらおぼえる。お風呂でおぼえる。歩きながらおぼえる、などなど。

歩きながら、というのは、なかなか効果的だが、おっとうご用心。というのは、通りでは思わぬ場面に出くわすことがあるからだ。「ちっちゃなごきぶりのべっぴんさん」というイランの昔話をおぼえていたときのこと。すっかりごきぶりの娘ッこの気分になって「いいえ、お断り。あたし、金輪際あんたなんかと結婚しないわ！」といったとたん、四つ角のかけから若い男の人が現れたことがあった！ ノルウェーの昔話「七人先のおやじさま」を練習していたある人は、「わしはこの家のおやじでない」といったとたん、生垣の向こうから中年の男性が顔を出し、怪訝そうに「おやじはわたしですが……」といったとか。わたしが聞いた中でのいちばんの傑作は、バスの運転席のすぐ後ろの高い席に座って、日本の昔話「牛方とやまんば」とおぼえていた人の話だ。つい声が大きくなったのだろう。「待てえ、三十郎待てえ」というくだりで、運転手が路肩にバスを止め、「お客さん、何か？」とふり返って尋ねたというのだ！

このような涙ぐましい（？）努力も、子どもたちの真剣なまなざしを見、くったくのない笑い声を耳にすると、苦労は十分報われ、新しい元気が湧いてくるのである。

（まつおか きょうこ／（公財）東京子ども図書館名誉理事長）

『神隠しの教室』（山本悦子作）、野間児童文芸賞を受賞しました！

第55回「野間児童文芸賞」に、山本悦子さんの『神隠しの教室』（絵・丸山ゆき／童心社刊）が選ばれ、昨年の12月15日に贈呈式が行われました。作者の「受賞の言葉」を紹介します。ぜひ、この機会に作品を「一読ください！」

受賞の言葉——子どもたちの明るい未来を信じて 山本悦子

野間児童文芸賞という賞があることは、もちろん知っていました。でも、受賞されるのは、輝かしい賞にふさわしい輝かしい方々で、わたしには縁のないものと思っていました。ですから、受賞のお知らせをいただいたときは、驚きのあまり言葉が出ませんでした。

『神隠しの教室』は、同人誌「ももたろう」に三年半にわたって連載していたものです。連載の第一回を読んだ作家の故末吉暁予さんが、「これは、あなたの代表作に

なるはずよ」と言ってくれました。その言葉に添えるよう努力をするのですが、ちっともうまくいきませんでした。幾度となく詰まり、後戻りし、慎重に進めているつもりなのに、気がつくとき糸が絡まるようにこんがらがっているのです。何度もチョコキンと糸を切って、おしまいにしようかと思いました。それでも、最後まで書き上げることができたのは、童心社編集部の中口さんが「続きを楽しみにしています」と書き終わるのを信じて待っていてくださったからです。

この物語では、つらい状況に置かれた子どもたちが出てきます。子どもたちを守るために、隠れ家への扉が開かれるのです。子どもたちは、閉ざされた世界で羽を休めることはできるのですが、最後には、そこを出て歩き出すことを決意します。子どもたちの未来は、どんなときも明るくあつて欲しい。そんな思いをこめて、物語を綴りました。

素晴らしい賞をいただきましたことを誇りに、これからも書き続けていきます。

（一般財団法人野間文化財団『野間文芸賞・野間文芸新人賞・野間児童文芸賞 平成二十九年年度要項』より）



授業中に子どもたち5人の姿が消えた。養護教諭の早苗先生には心当たりがあった。自分も小学生の時、この学校で不思議な体験をしたのだ。同じことが今この子たちの身に起きている……。そんなある日、保健室のブログに行方不明の5人からの書き込みが。「ぼくたち、もうひとつの学校にいるよ。早苗先生はどうやって帰ってきたの？」いじめ、家庭不和、虐待、ネグレクト……。子どもたちには守られるべき理由があった。守ろうとしたのは、はたして誰なのか？

『神隠しの教室』

山本悦子／作 丸山ゆき／絵

本体価格 1600円＋税

創業60年記念

わたしが読んだ童心社の本11

日常の

ことばで

描き出す

宮川健郎

みやかわ たけお／児童文学研究者、武蔵野大学教授、大阪国際児童文学振興財団理事長。著書に、『現代児童文学の語るもの』（NHKブックス）、「物語もっと深読み教室」（岩波ジュニア新書）など『全集 古田足日子どもの本』（全13巻・別巻1、童心社）編集協力。



ふるたたるひ、たばたせいいち／さく

「こは さくらほいくえんです。さくらほいくえんには、こわいものが ふたつ あります」——この語りはじめられる『おしいれのぼうけん』のペーシを何回めくったことだろう。刊行当時、私は大学生だった。やがて、いまはもう成人したふたりの子どもにも読み聞かせることになる。

『おしいれのぼうけん』が二〇〇万部を越えたニュースが流れたのは、五年ほど前だ。子どもたちに読まれつづける魅力とは何か。それは、作品が散文的なことば、つまり、日常のふつうのことばで語られるという点だ。日常のことばが描き出すのは、日常のむこうの、ふしぎな世界なのだが。

日本の子どもの文学は、一九六〇年前後に「童話」から「現代児童文学」へと転換する。小川未明らの「童話」は、詩的で象徴的なことばで心象風景を描く。それに対して、「現代児童文学」は、もっと散文的なことばで、心の中の景色ではなく、子どもという存在の外側に広がっている社会と子どもの関係を描く。長い戦争をへたあとの子どもたちの文学は、もう「戦争」も、戦争を引き起こすことのある「社会」も書かないわけにはいなくなってしまう。そうした新しい主題は、「童話」の詩のようなことばで書くのはむずかしい。新しい文体が必要になって、「散文性の獲得」ということがいわれたのだ。

そう主張したのが、一九五〇年代にまず評論家として仕事を始めた古田足日だった。代表的な評論「さよなら未明」（一九五九年）で、ことばの含意を強調する「童話」の表現を「呪術・呪文」と呼んだ。古田は、子どもの文学が詩的な「呪文」から抜け出

すことによって、子どもたちにむけて新しい主題が書けると予感していたのだろう。

六〇年代以降は自ら創作も手がけるようになった古田は、『おしいれのぼうけん』（一九七四年）で、日常の、あくまでふつうのことばを積み上げる。それは、子ども読者の日常のことばとも近いものだ。お昼寝前の保育室を走りまわって、みずの先生におしいれの中での反省をせまられたさとしは、「おしいれの そとで かんがえるよう」と問題提起をする。「さとちゃん、てを つなごう」「あーくん、がんばれ」——おしいれの中のふたりは、汗いっぱいの手で連帯する。ふつうのことばは、子どもたちの行動をくつきりした輪郭で描く。

古田のことばは、田畑精一の絵と緊密によりそい、ひびき合い、ねずみばあさんのいる、おしいれの奥の世界での大冒険をありありと見えるように描き出す。未明童話のように、ふしぎな雰囲気がかもし出されるというのではないのだ。未明は、一つの語に意味やイメージをぎゅーっと詰め込むから、長くは展開できず、すべては短編になる。古田のふつうのことばを一つ一つ積み上げ、順々に語っていくスタイルは、絵本としては異例に長いテキストを生むことになった。『おしいれのぼうけん』は、古田の未完の大作「甲賀三郎・根の国の物語」（『全集 古田足日子どもの本』別巻所収）の「根の国」という地下世界の冒険とも重なってくる。

「散文性の獲得」が「現代児童文学」の、そして古田足日の出発期の意志ならば、『おしいれのぼうけん』は、それを見事に実現した傑作といえるだろう。

盲学校図書館での経験から

いまから三十五年ほど前のことです。

大学生だった私は、サークルの仲間たちと、大学の近くにある盲学校の図書館を訪問しました。図書館には、自分の読みたい本を抱えた中学生たちが少し緊張した面持ちで並んで待っていました。盲学校の先生の司会で交流会がはじまると、私たちはすっかり打ち解けていきました。生徒一人ひとりから一冊ずつ本を預かったメンバーはそれぞれ自宅に持ち帰り、朗読テープづくりに取り組んだのです。

この盲学校の図書館には、もともと点字で作られた本も若干所蔵されていましたが、それ以外のほとんどは墨字（点字に対する言葉で、活字のこと）の本がジャンル別に並んでいました。一般の図書館と異なるところは、背の部分に、その

本のタイトルと作家名が点字でかかれたタックテープが貼られていたことです。

生徒たちは、棚に並んでいる墨字の本を点字で読んでいき、面白そうなタイトルや作家の本を棚から抜き出して、私たちを待っていたわけです。

大学卒業後、私は、出版社に勤めることとなり、現在も書籍編集の仕事が続けていますが、いまでもこの時の経験が原点のように思っています。

それは、私たちが日々作っている本をそのままの状態では読むことができない、あるいは読むことがむずかしい読者がいるということです。

誰でも利用できる場所としての公共図書館

みなさんが行かれている地元の図書館には、いろいろな立場の利用者がいらっ

しゃると思いますが、たとえば視覚に障害のある人を見かけたことはあるでしょうか。それ以外の障害のある人や、外国にルーツがあると思われる人はどうでしょうか。

これも四十年前以上前のことです。視覚障害のある当事者が公共図書館に対して、「私たちも地域の図書館を使わせてほしい」という運動を始めました。彼らが使ったキーワードは、「読書権」（読書する権利）という言葉でした。

その結果、公共図書館でも、視覚障害をはじめとする、なんらかの障害のある人に対するサービスを行うようになりました。残念ながらすべての図書館ではありませんが、ウェブサイトをチェックしていただければ、多くの図書館で録音図書、制作や貸出し、対面朗読室の設置、拡大読書器や音声読書器の設置などを行っていることがわかります。図書館によ

っては、知的障害のある人にもわかりやすい利用案内を配布したり、手話と字幕を使った利用案内の動画をインターネット上で公開しているところもあります。

「見えない障害」

先ほど「図書館で障害のある人を見かけたことがありますか」と書きましたが、たとえば、「視覚障害のある人」と一言で言っても、弱視の人の場合、白い杖を持たずに歩いている人が多いですし、聴覚障害でも同様に、補聴器をつけているなどの特徴がなければ、周囲の人には気づかれない可能性が高いと思います。

二〇一一年に、大野更紗さんの『困っているひと』（ポプラ社）というエッセイが話題になったことがあります。大野さんはビルマ（ミャンマー）の難民研究をしていた大学院生でしたが、ある日突然原因不明の難病を発症します。いろいろな検査を繰り返しても診断がむずかしく、原因も不明であるため、難病患者の身には、さまざまな困難が次から次と襲いかかります。

そうした「困っている状況」について、ユーモアをまじえながら綴るこの本は、評判となり、その後から「見えない障害」という言葉がよく使われるようになった。

図書館・書店の本棚に「読める・読みやすい」本を！

成松一郎

なりまつ いちろう／読書工房代表

みんなの本棚プロジェクト

私は、二〇〇四年から読書工房 (<http://www.d-kobo.jp/>) という出版社を設立し、障害のある人をサポートするための

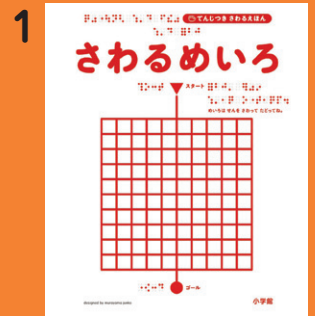
りました。

難病患者、発達障害のある人、読み書き障害（ディスレクシア）をはじめとする学習障害のある人など、外見からはわかりにくく、本人は困っていることがあるのに、なかなかサポートを受けられない立場の人たちのことを指しています。



布の絵本『おむすびころりん』（ふきのとう文庫）。さわって楽しむほか、ページによってパーツを動かすことができ、自由にお話を考えることもできる。

2



『てんじつきさわるえほん さわるめいろ』（村山純子／著、小学館）。点字の線をさわって迷路をたどる。目の見える人も見えない人も楽しめる。

3



大きな文字の青い鳥文庫『黒魔女さんが通る!!』（石崎洋司／作、藤田香／絵、講談社、販売・読書工房）。通常の青い鳥文庫（右）と比べ、多くの弱視の子どもたちにとって読みやすいとされる文字サイズや書体（22ポイント・ゴシック体）で編集している。

4



マルチメディアDAISY図書・伊藤忠記念財団わいわい文庫『ばけものづかい』（せなけいこ／作、童心社）。音声と一緒に文字や画像が再生されるデジタル図書。読んでいる箇所がハイライト表示され、文字の色や大きさ、読み速などが調整できる。

本や、図書館のサービスを充実するための本などを出版してきました。

また、二〇〇五年からは、出版や図書館関係の仲間たちと、出版UD研究会 (<http://www.ud-pub.org/>) という不特定の勉強会も続けてきました。

今後は、さまざまな立場の読者がいることを「見える化」するために、図書館や書店の本棚に「読める・読みやすい」本や「多様性理解」につながる本を並べるプロジェクト（みんなの本棚プロジェクト）を展開していきたいと考えています。

これから選書委員会によるブックリストづくりをスタートさせる予定ですが、現時点では以下のようなジャンル分けを考えています。

《声で読む本》

オーディオブック、音訳図書、音声ガイドつきDVDなど。

《さわって読む本》

点字つきさわる絵本（写真1）、点訳図書、布の絵本（写真2）など。

《読みやすい本》

大きな文字の本（写真3）、マルチメディアDAISY図書（写真4）など。

《わかりやすい本》

Ｌブック（※）など。

《さまざまなことばで読む本》

多言語図書、手話DVDなど。

《さまざまな立場の人についてわかる本》

障害をはじめ、さまざまな特性やニーズのある人、多様な立場のマイノリティについて正しい知識を学べる本など。

これまでこうした本は、ボランティアが手弁当で製作したり、小さな出版社が細々と出版してきた歴史がありますが、図書館では目立たないところに配架されていたり、あるいは閉架式の所蔵になっていたケースも少なくありません。たくさん売れるものではないので、書店での状況はさらに厳しく、置かれているケースはきわめて少ないのが現状です。

最近の世の中を見ると、国内外とも「排除」（「包摂」の反対語）や「分断」の流れが強まってきているように感じます。私は、社会全体がさまざまな立場の人を包摂していくための一つの方策として、「みんなの本棚」がいろいろな場所に増えていくことを願っています。

※知的障害や自閉症のある人が理解しやすい文章や図版を使って編集されている本。スウェーデンをはじめ、欧米を中心に出版されており、Lättläst（わかりやすいという意味のスウェーデン語）の略。

2017年 紙芝居作品をみる会

童心社では、毎年、紙芝居の脚本家や画家の先生方をお招きし、紙芝居を鑑賞する会を開催しています。第1部は近隣の園児たちも一緒に紙芝居を見、第2部は大人たちだけで鑑賞、第3部は交流会という構成で、和やかな雰囲気の中で、改めてよりよい紙芝居作品とはなにかを考える場になっています。会の感想を加藤純子さんにお寄せいただきました。

紙芝居とは舞台プロデュース

加藤純子 児童文学作家

これまで児童文学の世界だけに軸足を置いていて、紙芝居がどういうものなのか知らなかったわたしがこのたび紙芝居の脚本を書かせていただくことになりました。たまたま家に遊びに来た幼稚園・年少組である孫娘が、目ざとく紙芝居を見つけました。そして「紙芝居、やってー!」と目を輝かせました。彼女はお行儀よく正座すると大きな声で紙芝居の歌を歌い出したのです。どうやら、幼稚園でやっている紙芝居を始める前の儀式のようです。



先日童心社「KAMSHIBAI HALL」で行われた「紙芝居作品をみる会」に初めて参加させていただき、実際に紙芝居を演じてくださったのを見ながら、わたしはあの時孫娘がやった「儀式」にひどく合点がいった気がしました。紙芝居は子どもたちにとってある種、異界へ向かう入り口だったのです。そのためには子どもたちが紙芝居世界へと足を踏み込むためのアプローチが必要で、それが孫娘のやった正座と歌だったわけです。

「紙芝居作品をみる会」にやってきた保育園の子どもたちは紙芝居が始まると息を飲むようにしてその世界に入り込んでいきます。そして演者の呼びかけに、まるでファンタジーの世界に放りこまれた旅人のように大きな声で応えます。

「この集中力はどこからきているのかしら」そう考えていて気づいたのが一つは演者の力。そしてもう一つが三面開きの舞台です。この舞台はある意味子どもたちにとって現実と紙芝居世界との「境界」でもあったのです。三面開きの舞台が開くと、とたんに境界は解かれそこから子どもたちは今いる現実から紙芝居の世界に運ばれていきます。子どもたちと一緒にその世界に入りながら、のぞきからくり的な手法や、紙芝居をぬくといった計算された動きに引きこまれ、いつの間にかその世界にとけ

あっていました。紙芝居というのは、演じることも含めた小さな舞台の総合プロデュースだったのです。

紙芝居を終えた子どもたちが「あー、おもしろかった」と言いながらうしろに座っていたわたしたちを見ました。すると一人の女の子がわたしに「赤い口紅がかわいいね」と。ちょっと恥ずかしくなりながら「ありがとつ」というと、ほかの女の子たちもそばに寄ってきてくれました。ここにいるのは紙芝居を書いている人? そんな顔で子どもたちがわたしたちを見えています。子どもたちの小さな手と握手をしながら、これは大変。二〇一八年度の紙芝居ラインナップに入れていただいているのに紙芝居のことをちっともわかっていなかった。そんな総合プロデューサーのような視点などなにか一つ意識したことなかった。すごいパワーを子どもたちにもらいながら第三部の交流会に参加しました。天気予報も外れ雨にもふられず、木の温もりに包まれた童心社「KAMSHIBAI HALL」にはおいしそうな食べ物やテーブルがたくさん並べられています。まるで冬のあたたかな陽だまりのような空間です。そんな童心社の皆さまの細やかなお心遣いと一部二部で演じてくださった編集者や数人の作家の方々の紙芝居の余韻を楽しみつつ、大きな宿題を抱え帰路につきました。

BOOK

鬼はー外！ 福はー内！

立石展大



『セツブんのおに』

常光徹／文

伊藤秀男／絵

本体価格 1300円＋税

節分になると、今も日本中の子どもたちが楽しげに豆まきをします。その大豆には、鬼を退ける力があります。そんな豆まきの由来を語る『セツブんのおに』は、徳島に伝わる昔話をもとにしています。ここに登場する鬼は村娘の「ふく」を嫁にするためさらっていきます。そこで、村の若者が娘を取り戻そうと山奥の鬼のすみかに向かい、ハラハラする展開が始まります。そして最後には、若者と娘は鬼に追われながらも、話は「鬼は外、福は内」の由来へとつながります。

立春の前日に当たる節分は、季節の変わり目です。季節の変わり目には、神が訪れますが鬼もやってきます。いわゆる「鬼は外、福は内」の唱え言をして、豆で鬼を退ける節分は、室町時代には行われていた記録が残っています。日本人が旧暦で生活していたころは、正月と節分の時期が近かったこともあり、節分にも年越しの意味を含む行事が多くありました。現在も行われている「年の数だけ豆を食べる」習慣も年取りの名残です。豆を食べることで年齢を重ね、新たな年の健康を願いながら年を越しました。ちょうど、正月に餅を食べるように、節分に豆を食べたのです。そんな豆を用意する場面も、『セツブんのおに』で描かれています。恐ろしい鬼を祓う先に新しい日々の幸せを祈る話を、どうぞお楽しみください。

(たていし のぶあつ／口承文芸研究者)



本体価格 1200円＋税

今年ももうすべおしまいです。おじいさんとおばあさんはもちつきの準備をしています。そこにお腹を空かせたねずみが訪ねてきたので、おじいさんとおばあさんは、お米をわけてあげました。次の日の朝、ねずみが「おれいに、もちつきをてつだいます」と一緒につれてきたのは、……十二支たち。はじめて季節の行事に出あう子どもたちにも、「お正月」「おもちつき」「干支」に親しみを感じてもらえる絵本です。

●第3回 児童ペン賞・絵本賞 すとうあさえ『十二支のおもちつき』 画家賞・早川純子



本体価格 1300円＋税

●第3回 児童ペン賞・童話賞
楠章子『ばあば、だいじょうぶ』 画家賞・いしいつとむ

大好きな、やさしいばあばが、この頃変わってしまった。何度も同じ質問をしてきたり、得意だった編み物ができなくなったり。ばあばは「わすれてしまう病氣」なんだ。そして冬の寒い日、ばあばがいなくなった……。古い、認知症、介護といった、とても難しい、しかし誰もが避けては通れない問題を子ども視点から描き出しています。記憶を少しずつ失っていても、それでも変わることのない人間性、家族の繋がりを描き出す感動作です。

祝 受賞のお知らせ

CONGRATULATION

2月の新刊図書！

あいさつしかけえほん いただきます

新井洋行／さく
本体価格 1200円＋税



くまさんのだいこうぶつのくだものはなかな？
しゃきしゃきりんご！ いただきます！ しかけ
をめぐって楽しい絵本。

童心社のおはなしえほん

きょう、 おともだちができたの

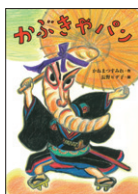
得田之久／作
種村有希子／絵
本体価格 1300円＋税



はずかしがりやのゆうなちゃんにはともだちが
いませんでしたが……きょう、ともだちがで
きました。はじめてともだちができた日の絵本。

絵本・こどものひろば かぶきやパン

かねまつすみれ／作
長野ヒデ子／絵
本体価格 1300円＋税



開店前のパン屋「かぶきや」で、パンたちがさわ
がしくごきはじめました……。第6回絵本テキ
スト大賞受賞作！

クリスマスに贈る本として本人が本屋さんで選
びました。見本を読み、子どもだけでなく親も優
しい気持ちになり、是非手元に残る本として置いて
あげたいと思いました。しろくんの寝る場所をく
ろくんがゆずった場面が印象的だったようで、
やさしいね、と言っていました。思いやる優しい気
持ちは学べる本です。（大阪府 J・M 三三歳）



絵本・こどものひろば
くろくんとしろくんのいそぐさ
なかやみわ／さく・え
本体価格 1200円＋税

読者の声



イラスト／津田櫓冬

「母のひろば」への「意見・感想」のほか、子育てについて日々思
うこと、子どもたちとの活動など
について、お便りをお寄せくだ
さい。送り先は下記、童心の会宛で
お願いいたします。

＊お便りを誌面で紹介させていただく
ことがあります。その際には編集部で
選んだ絵本を一冊差し上げます。

お便り、
お待ち
しています。

あとがき

2018年2月15日発行（毎月刊）
母のひろば 第645号
定価50円（年600円／送料とも）
発行所：童心の会
〒112-0011 東京都文京区千石4-6-6
株式会社童心社内
電話03(5976)4402
編集発行人：大熊悟
童心社のホームページ：
<https://www.doshinsha.co.jp/>
フォーマットデザイン：bise inc.

定期購読のご案内

おハガキにてお申し込みください。
下記QRコードからもお申し込み
いただけます。見本誌（無料）と振込用
紙をお送りいたします。

見本誌に同封
されている振
込用紙で購読
料をお支払い
いただきます
と、手続き完了
となります。
購読料金は1年分600円（送料とも）。



●昔の親はえらいもので、幼い僕を
寝かしつけるのに絵本などを見せるこ
ともなくお話を聞かせてくれました。
宵っ張りの僕は目を爛々と輝かせ
次々お話をせがんだものです。特に
記憶に鮮明なのが「雪ん子」です。
雪の白、女の子の頬の赤の対比が鮮
やかで、美しく悲しい話でした……
お話を聞かせてもらうのは子どもにと
って本当に大切な経験なのです。◎

●「大きくなったら何になりたい？」
ありふれた質問に、幼い頃の自分は
わだかまりなく答えていたつもりでし
た。でも我が子に初めてその問いが
かけられたとき、思わず「やめて！」
と言ってしまったのは、本当はそこに
透ける大人の期待を読み取ることが
嫌だったからかもしれない——、東
京に広がった無垢の雪景色を見なが
ら、そんなことを考えました。▲